『幼稚園の現場から』
24・お話あそび会（その１）

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

●発表会の意味

ほとんどの幼稚園・保育園・こども園では、年間を通じていろいろな形で教育・保育の成果を保護者の皆さんに伝えています。運動会、作品展、音楽会、そして２学期後半から３学期にかけ、一年間の教育・保育の集大成として「生活発表会、おゆうぎ会」などの名称で実施されています。
今回はこの手の発表会について考えていきます。※文中では「生活発表会」と表します。

［写真はお話あそび会の様子：本文とは関係ありません］

幼稚園や保育園にとって「生活発表会」は、教育・保育の成果を伝えるという意味を持ちながら、園の広報的側面も強い性格のものだと考えます。
子ども一人一人の出番を作り、歌や合奏、お遊戯、演劇などを披露し、招いた家族に我が子やクラスメイトがしっかりやっている姿を披露し、努力の成果を感じてもらって「この園に入れて良かった！」という実感とともに評価を高めてもらう。それは私立幼稚園の宿命である**経営上の大事な開催目的**でもあるのです。

そんな大切な行事ですから**「少しでも良い発表にしたい！」**という思いは誰しもあるのですが、その気持ちが強すぎると「見栄え・出来映え」が優先されて、本来子どもが主役なのに子ども自身が楽しくなかったり、活動への意欲が沸かない状態になってしまう。だけどやらなくちゃいけないというジレンマの中で保育者も葛藤をする。こんな困った問題が生じてきます。

後半で書きますが、私が自分の園の生活発表会を見直した理由は、練習時間の膨大さのわりに当日が過ぎたらもう興味がなくなってしまう活動の浅さ。そして表現活動としての意味が見いだせなかったことです。
どこの園もそうだとは思いませんが、類似した行事が日本全国で行われているとしたら、同じような問題も抱えているのではないかと思うのです。

まずは、生活発表会という行事をとりまく構造について考えてみました。

▶伝統の中で見落としがち

私の園も25年前には、生活発表会という行事を行っておりました。自分は当初から関わったわけではなく、30数年続く園の歴史の中で**「この時期に、この行事を行います」**ということと、**「どうやるか」**だけは伝えられましたが、この行事を通して子どもの何を育てるのか、ということは聞きませんでした。
最初にこの行事の計画を考えた保育者たちは、教育的目的もしっかり押さえていたと思うのですが、長年続けていくうちにそれが霞んできて、年々入れ替わる新規職員に、大切な目的が伝えきれていないという現実もあるのではないかと思います。

「発表会の形骸化」という問題です。

▶気づきにくい構造

各園で伝統的に続いてきた、ということはその活動を経験した人がたくさんいるということです。家族はもちろん、保育者も、園長も。

この活動をいちばん喜んでくれる祖父母の皆さんは、自分の娘、息子とダブらせて孫の活躍を見る。父母も自分の経験と照らし合わせて我が子の頑張りを見る。保育者も自分が指導されたように指導をしていく。皆で懐かしさという合意形成がされているところに、疑問を挟む余地はなかなかありません。「これはやるもんだ」という前提となってしまっている構造があります。

▶教育的意義

教育的意義という言葉は、園内という狭い枠の中ではリーダーの理念もしくは信念によって、いかようにも正論付けられるきらいがあります。

すこし話が逸れますが、運動会で伝統として鼓笛隊を発表している保育園の話です。10月開催の運動会に向けて日々の練習に力が入っていたそうです。単調な練習が続くので、ある子どもが嫌になり家に帰って親に訴えました。そこでお母さんが練習の様子を見に園に行くと、炎天下での練習が長引いており、驚いた母親は･･･言い方はその通りかわかりませんが園長が言うには、「ウチの子を殺す気か」と訴えたそうです。この話は、私ども園長同士の雑談の中で話されたものですが、「そりゃ、やり過ぎたんじゃないの？」と思う私に相手の口から出た言葉は予想外のものでした。

「あの親はわかっていない」「素晴らしい活動を達成することこそ、子どもの成長につながるのに」と主任と意気投合したというのです。まったく最近の親は甘いと当然のように仰いました。

炎天下での長時間の練習はさすがにマズイでしょうけど、親が意を決して苦情を述べるほどの事柄をそんなに簡単にスルーして良いのか？と驚くとともに、その信念に裏打ちされた実績と伝統があるのだろうと思わされたのです。

たとえ練習を嫌がったとしてもやらせる意義はあるのだ！乗り越えた先に喜びがあるのだ！それがわかるときが来る！と確信を持って取り組んでいる園は意外と多いのかもしれません。

水を差すようで申し訳ないのですが、私は生活訓練やマナーを身につける活動での我慢を強いることや、好き嫌いにかかわらず取り組ませることが必要な場面はあると思いますが、表現活動にそれが必要でしょうか？と考えています。

ちなみに、私たちが教育活動の基にしている「幼稚園教育要領」に書かれてある「表現」のねらいと内容には、

「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」

（1）いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。

（2）感じた考えたことを自分なりに表現して楽しむ。

（3）生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

とあり、内容解説の本文中にも、自由、自分なりに、親しむ、遊ぶ、創造する、楽しむという言葉が多く使われています。

具体的にどんな活動をしなさいとは書かれていません。そこが各園の創意工夫、私学の独自性を発揮するところですが、教育要領のねらいどおり、**子どもたちは、創意工夫し、自分なりの表現を楽しんでいるでしょうか？**疑問が残るところです。

私の園も、以前はまさにそのような環境の中でやってきておりました。いつの間にか優先順位が逆転してしまった発表会に疑問を感じながらも、「そもそも子どもにとって･･･」という根本にメスを入れられずに日々は流れていくのです。

▶結果オーライが隠れた問題を帳消し

生活発表会だけではなく、園の活動の本流が園長や理事長、主任などのリーダーの考えによって決定されるのが一般的です。

そして、たとえ子ども不在の活動が展開されていたとしても、結果はオーライになるはずなのです。なぜなら、まず当事者である子どもは、その方針の是非について意見を言えるわけでもなく、「つまんない」と言って逃げ出したり、他の子どもにちょっかいを出して叱られたりする程度の抵抗をするだけです。

では、鼓笛の練習に抗議したお母さんのように保護者はしっかり見ているでしょうか？たいていの保護者は、発表までの練習をつぶさに見ることはかなわないと思います。本番でどんなに素晴らしい演技が披露されるか楽しみに待つのです。もし家で子どもが不満を漏らしたとしても、園での状況は想像するしかなく、たいていのお母さんはみんなと一緒に行動することを望むでしょう。**「そんなこといわないでがんばりなさい、お母さん楽しみにしているから」**という声をかけてくれるでしょう。

そう言われた子どもは、頑張ろうと思って練習に取り組みます。

周りの大人がみんなそういう雰囲気でアプローチしますと子どもはとても柔軟にそれらを受け入れ、指導者の望んでいる一定の成果をあげ、子どもたちも何かしらを身につけることができるのです。結果はオーライ！来年も同じようにやろう！

犠牲にしたものは何だったのか？

結果オーライならいいじゃないか！

▶現場での葛藤

どのような方針にしろ、発表会というものは期日と内容が決まっており、そこに向けて練習し完成させるということは避けて通れません。そんな状況の中現場の保育者は「完成度」を見ないわけにはいけません。本番が近くなるにつれ受け持つ子どもたちへの指導・練習量が多くなり、得意な子どもは嬉々として取り組む反面苦手な子どもたちの本音を聞いてあげられず、子どもたちの笑顔が少しずつ消えていったり、ノルマを感じてきたりしたときに、**「このことってどんな意味があるんだろう？」**という根本的な疑問が頭をふとよぎるのです。

しかし、そんなところで立ち止まっている余裕は職員にはありません。その園に採用され、その園のやり方を先輩から教わり、「前回よりも良い結果を！レベルを落とすわけにはいかない！」という意識が高いほど、まずは失敗しないように、そして自分もクラスの子どもたちもより良い評価を得るために「あそこまで頑張ろう！乗り越えよう！」という意識が働くのが普通ですし、社会的義務でもあります。

それさえ乗り越えれば、結果オーライ！

頑張ったぶんだけ達成感や成就感！「よかったよ！素晴らしい！」という評価が待っているのです･･･あくまでも“大人サイド”のものでありますが、その密は甘く先生冥利に尽きるものですらあります。

▶個人の力量とマッチング

園で行われる教育・保育活動の全てに保育者個人としての力量が問われることは言うまでもありません。実力が十分ではない保育者は、ベテラン保育者と同じ教育効果を得るにも時間がかかったり、子どもたちの変化に気がつかなかったり、意欲を盛り上げる言葉掛けが不十分だったりという現実問題はありますので、同じ活動をしていてもあるクラスはイキイキとやっており、あるクラスは嫌々やっている、というような場合は力量差が大きいと見て取れます。

我が園の方針を見つめ直すことを提案する前に、与えられた方針でどれだけのことがやれるか、まず努力してやってみるところから始めるのが普通だと思いますが、次第にその園で必要とされるスキルが上がっていくと、最初に感じたことが何だったか感じなくなってくることもあるでしょう。それゆえ、この手の行事にはメスが入りにくいと考えます。

もし、子どもたちを追い込む指導に問題を感じていた保育者がいたとしても、それを提案する前に身を引くことが多いのも一因でしょう。

「発表会の練習がきつくて、子どもたちを追い込むことが嫌で辞めました」という保育者と会ったこともありますし、「発表会に力を入れている園に勤めていたけど、自分の子どもはそういう園は避けました」という内容がネット上の掲示板でも語られています。

疑問を感じた職員が、組織の中で新しい提案をするのは非常に勇気が必要で、困難なことなのです。

子どもたちの晴れ舞台となる発表会の練習過程でも、子どもたち自身が喜びや楽しさを味わい、考え、創意工夫しながら保育者と一緒に作っていくこと。それが日々の生活をイキイキと盛り上げ、生きる力もつけていけると思うのです。子どもたちが主役になれるように工夫している現場の先生方も大勢いらっしゃると思いますし、悩んでいらっしゃる方もいるでしょう。

今回は、私が取り組んできた拙い実践を紹介させて頂き、皆さんの生活発表会を考えるヒントになれば幸いだと思います。

●生活発表会を見直す

私が原町幼稚園に勤務をはじめた1991年当時（25年前）、1957年園の創立から34年の歴史があり、生活発表会は運動会と並んで年間の重要な行事でした。

原町幼稚園で行われていた生活発表会は、年少児は主にお遊戯、年中長は合唱と合奏、演劇活動が加わり、舞台の上で発表します。

当時は、夜明け前から席取りのために保護者や祖父母の皆さんが座布団を持って入口に並ぶという、家族ぐるみで楽しみにしているお祭り的な行事だったのです。

私は２年間その取り組みを見ていて、疑問がふつふつとわき上がってきました。

疑問は二つ。一つは、発表のために費やす練習量が膨大なのです。年長児は、合唱、合奏、劇（遊戯）と３つの演目を同時期に練習します。

時期になると「子どもたちのあそぶ時間がない」というのが悩みでした。練習練習の日々が嫌になって「幼稚園に行きたくない！」と主張する子もいましたが、25年前の子どもたちは我慢強いです、先生の指導に従って粛々と“頑張って”おりました。

保育者もそんな子どもたちの姿を見つつ、本当は遊ばせてあげたいけど、発表会でお客

さんの期待に応えるためには、**ここで心を鬼にしてやらなければ**、と思って頑張る。結果子どもたちを追い込んでいくことにつながってしまったのです。これはこの行事に限ったことではなく、運動会や音楽会などの発表を伴う行事にありがちのジレンマでした。
（もう一つ加えれば、運動会でもメロディオン鼓隊のマスゲームが“目玉”でもあり、運動会のかなり前から相当の時間を費やしておりました。）

▶ねらいを絞る

まず、この問題の解消のためにねらいを絞り、活動を分散することにしました。
お遊戯的な身体表現は「運動会」へ移し、ダンスや舞踏的表現として同様のねらいを達成することにしました。音楽と演劇活動は「音楽会」と「劇あそび会」（後のお話あそび会）へ日程を振り分けて年間計画を変更したのです。今ではこの３つの行事を「３大表現活動」と呼んでいます。運動会で行っていた鼓隊は音楽会に吸収し、取り止めることにしました。

▶子どもは楽しんでいるか

生活発表会の改革に至った、二つ目の疑問が「ほんとうに子どもたちは表現を楽しんでいるのか？」ということでした。
お遊戯は、もともと音楽に振付を当てはめていくものですからリズムに乗ってダンスすること自体が楽しいわけです。歌や合奏もそれ自体から楽しさが生まれます。
いちばん悩んだのは劇です。
当時行っていた劇は、保育業者さんが販売する発表会のための豊富な教材の中から、音声セリフ入りのＣＤとシナリオを使っていましたので、子どもはセリフを発せず口パクで動くというものだったり、大人や学童の演劇を幼児用に簡単にしたものだったり、大人の決めたシナリオで演技を覚え込んでいくという活動だったのです。
あくまでも私の印象です･･･
「これでは猿回しだ」
なぜなら、子ども自身が楽しめておらず、型にはまった表現を間違えないように発表することに主眼が置かれていたからです。どこが本人たちの表現活動か！と言いたくなるような状況があったわけです。
発表会が終わって「ああ、おわった！」と開放感を味わい、「うまくできた」「まちがえなかった」「がんばった」という達成感と評価は得られますが、「ああ楽しかった、またやりたい！」という感想は出てこなかったのです。その後の子どもたちの姿に生活発表会の余韻などありませんでした。子どもたちはまさにノルマを果たしたのです。

それで思い切って行事を改革しました。
保護者の反発、とりわけ孫の発表を楽しみにしておられた祖父母の反発は大きかったと記憶しています。「楽しみにしていたのに」「なぜ今年からなのか」という声です。
活動の主旨を丁寧に説明し、子ども主体の保育方針を理解して頂けるように訴え続けるとともに、活動をより良いものにすることとに努めてきました。

改革後２年間続いた「劇あそび会」は手探りの状態でした。ごっこあそびに毛が生えたようなレベルで保護者を招待してやっていたものですから「子どもは楽しそうだけど、何をやっているか分からない」という批判も頂きながら、自己満足や子ども目線だけではダメだ、保護者に理解されてこその私立幼稚園の教育活動であるという視点を再度持ちつつ**『やって楽しい見て楽しいお話あそび会』**をキャッチフレーズに20年以上試行錯誤してきました。

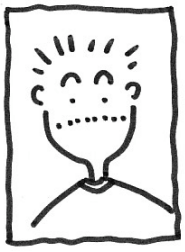
具体的な取り組みについては次号で書いていきます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」マガジンラインナップ

第１号　エピソード
第２号　園児募集の時期
第３号　幼保一体化第
第４号　障害児の入園について
第５号　幼稚園の求活
第６号　幼稚園の夏休み
第７号　怪我の対応
第８号　どうする保護者会？
第９号　おやこんぼ
第10号　これは、いじめ？
第11号　イブニング保育
第12号　ことばのカリキュラム
第13号　日除けの作り方
第14号　避難訓練
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について
第17号　自由参観
第18号　保護者アナログゲーム大会
第19号　こんな誕生会はいかが？
第20号　ＩＴと幼児教育
第21号　楽しく運動能力アップ
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



原町幼稚園　園長　鶴谷主一
ＨＰ：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：osakana@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder